中村俊定文庫
文庫 18
37

宮城県図書館蔵

# 賦何餅

俳諧連歌

幸和

陵定藏

うらかぜやさんぬきのうむ一乃雪
ちらぬ花ちらぬ花にはへと
おさまひかりうひきるんこ友うして
ふにもうさるむやうちく
ちりぬ露乃ちく芋ふ紫ふ流を長く
うそさむ〳〵ひの名月乃元
酌かりに和も酒乃酔さめく
唯乃かく〳〵や五葉と小菊

第五章　旅乃やどりに腰をかけ
なれぬ山つたや行にぬれる
普賢堂乃石ハ
をゆやいとをとゝふ堀ゝ
あたに三ヶ所入も又よゝかへり
雑賀乃せめをうつる科人
給ふ地獄乃所ハおそろしや
諸事ハ行ゝ後世を祈りん
思ひに別れ遠ゝ世せんもの
みなよゝ早朝乃月

乃ゝ
露も見しぬ次ゝ乃ぬる
花乃宿よゆゝしあのうさつゝさ
詠にかゝんん　笈乃いけやう

ゝ面ゝ乃をゝへのさ数奇ゝ道
新まふもあり樂ふくもあり
堂塔ようつし重ゝる天しゝ女
所繪をわゝや　たゝむゝ仏
こもゝ焼ゝ寺袋乃口おけて
刀をゝそゝ　ぬくむをゝ

雁帽子の乃いとゝ乃須やさぬん
とろり〳〵と　初夏の　大　に
おこるへる芳舎乃庭乃秋山
とゝ　さきわ　つゝすむ　蕣火
書をすゝ門戸を乃風乃吹とをわ
ちわもかこわもこゝよこみ町
ちちて涼きん　月乃夕く
ちわ出　乃　石　蕣乃　沖
二ウ
乃るをも入へきゆゝ戸をゝき
ひとわ　師乃　住居　地しき

唐家をゝ指番をさしもこれ
須磨野乃奥乃たくの水
琴乃ゝをあやしと年やを風ん
待秋さゝめく軒乃　松風
埋ゝさふらんやむゝ伊勢
小ゝ乃　ハい文もくれさる
元ゝ仏事をゝやゝ一向宗
月乃八ツちわきく夏乃蕣
松を仏と蕣の月ハさゝく
落ゝとにおゝ　ゝ人

初花をたづねてもとく持やえぬん
よりくとも花ぞ乃宮

三 庭訓乃長世部をきへまわたれ
殿ものむらふいうま彩象と
かいろの乃加減もたるに移わ指て
鳥をとるへきやうはあるさる
遊物の鷹はぬ氏に羽をとるこ
仙のおそりに屋乃越屋
百性のたをれ乃もきたるて
をもたのつくるはあやれやせ牛

大原木はきつれて出るし
見れよ小舞乃ものはえるぬ
酌をそわをを乃しき美衣を
飛うそへは服もやうく
月乃和世をさをを氏綿る

三ウ 老ゝ 命下 火桶をわをわ
祝えする形はたこにをさく
さしさくるひとり旅人
志わあはたらひ吹れる乃上
ゐ乃ようをとひ一陣

大将乃はゝ前にらくまうの書
そこなわるさま使者乃弁舌
面白きこと〳〵書くいのうせん
かの弱き露もたゞへし
山くれとも月をかしに待給へ
言ふ人かいくよくゝめ給へ笛
誰もかも放下乃曲や見ふらん
上ゝ白ゝわゝてひゝ下る乃鞠
一ゝ見んたゝるをもおもむ花乃枝
狼籍るわや　梅乃枝ゝ

かゝ
かゝるに大海前ゝは宝前
朝よりきよわかゝく炊用
ゝろゝする親乃はゝ多を清め
後後乃布施しあぐる胸指
寄ゝいわゝと思ひきわて世を遁
こ海さくれしゝうきふるひ子
歌をゝわて報乃おゝをゝたゝり
そゝへとゝ知るゝ中おゝち
多ゝめゝ筆をつゝ指の古き
用んきひし九文内秋

月ゝさん待賢門院さうかるゝ
かゝるときとなりぬれとわた
つまりに世間をさとりまして
あらめやうの乃　天八乃部
吉田を立るハ呂律乃古代上
うそうまゝとうふうこゝろひう
うゝと待よりわて乃ひとり
とゝや京をしこふる立乃乃
書れ　四部　春をおりひ出
後宴てゝふ美鮎乃すゝ

川長とゝてすゝハ春縁后
あち乃鴻　こち乃春改

硯何 市二

三界やあらし嵐乃衣笠
袋ハ吉野風乃又和
あらくるるれと業務の出りて
ひのもやすん例乃思方
みさらら蛤貝に敷くよ
猪乃牙のさめハちきき表紙
月に書をこすりの歌をとり
ひとりのひとりやふ奇道石

ウ
炭ちもとうんをあひく打あく
きれいしらわかけのる
それと云れ都乃神の伊勢参り
杖ひとも やさ花笠
美濃乃朝鶯招てくひきく
吉の野ふ山根こうく
あわやこと きへめ道ハふまよし
柏ならひてしのふ こ書こ
菊の吉を所やをてきさん
さ也 神ふく 山へうく 庵

とくく田を刈そふ時つゝ
月そるくまゝ諸動を
日和定め難き家ハ宜し
犬そろ〳〵酒あけ乃書
二 ぬゝわるんと思ふ狐ハたけきもて
ゐをたゝやゞ犬もとゝと三月まる
せんぢちやに三ハ
誰も亡ゐを
うやまひて中に
さゐく魚乃名をそあつた

書き乃林ふ好あやゝ月あるん
めり出さゝ湯乃山ゝ
ゐむふ報乃流れ酒毒よ
しこまわ
猫ハぞる庭熱をそして
系箱ゝて
休あまゝくんるゝ
さひし出家乃鳴乃看病
三 仏のもゝ田面に居三ゐく
かけゝうまハ世をわるへき

千年もうこうく持ち榜もろ風
ちうんきと屋さうの あひ乃中川
にこゝめをたこうとのあうて
たきわゝ岑もちとにしやむ
あのゝぬう不敷や赤ぬうきん
ちうへもるゝたるゝうりそうき
うゝくゝとちうめたのゝにさるハれ
他国へゆくハふきえんあん
既巻ちわも弘よん乃ひゝされて
ものにゝをかゝ検校乃性

月花もめくめ山路乃ちゝわ坂
かくれ 鬼乃 耳の形は
三 お寿む庫をを鶯れれ乗り
わゝる矢ゝをたまゝきゝゝん
わさいをすゝの鬼乃おゝしき
いま月閑路もらくにゆきふ
和乃ゝ行ぬゝ前ゝるゝいまゝ多ゝく
せるをやりつゝる弘乃とせんさ
そゝゝ人めかまゝよりあを中くゝよ
ゝんきいゝゝゝゝハゝそゝろ

ゆうとうむまれけをうゝこ絵
むふ鏡をなけすてめるわ
俄よも老しるやゝに地ろきて
かゝへばゝさまゝ芸分乃大至
月きき旅乃首途乃つひ幾
をとこ門を形よかゝきあ

三ウ

和田神乃利生あゝに影わて
例ゝめゝも長崎ゝる
屋也猫ゝ薩やうわてくいすし
鯉乃ゝ

桃を乃日ゝこそゝあゝまゝ春雨
桃も神ゝきもあゝたまわめる
はゝをきき雑巾をゝふ花乃春
ゝ方ゝむひ寒くむひ
長崎ゝ一家一門お問まわて
迎ゝをゝん 浪合
尺めゝきハゝふんゝやゝれとひをゝ
おゝわゝを三筋町
春ゝくし長かゝるゝ月乃言
辻おゝゝ見しきれ

名
さしき狂乱の後のあらはれく
卒命とつきて三井寺に住侍
被[illegible]も煩悩の業をさ
ときわけまへとて十年
わきさしたる[illegible]月利して
ひく質の棚とそしる
貪きを是いやをそろるめん
孝則のあるをうつむし
山伏の法の道にたりふく
まりすくるかつきの峯

のあらはれ和上あやをり
新熟籠の
只そのよい天下一なる亀の月
さ晴ゆく
祝儀よりも[illegible]
鱈昌なるかかやや頃を殺さん
綿よりの[illegible]
市をなるなり大名の門
[illegible]
花軍[illegible]

玉乃日に玉乃かんさしかゝやきく
乃しすゝ氏篠乃うちを氏向さ

## 二字陰篇　才三

笑顔乃志ろやこの折る花乃露
胡蝶を氏しあそぶ児達
世間ちる辞乃あわ八きようそ
笛乃大事乃伝受しめわ
いくそくそそこるん乃針
むつふ磁石に志るき南方
月くらき夜をする丑ふた
河をくり つまり初ゆく

ウ
雪ふかう小笠原の矢八のひるまて
城へ乃ゑいとうさうきう
老婆乃三のひめ一ハ越うさ
うくとあをかれぬそ人
かゐ中乃おもてぬたちたうけ
をこさしやうへき質ゑもち
布施おをとゝぬいとめ石や筆
るゝくゑ屋ゑ乃おはいんん
ゑやうゑ乃ほとにたうふ孫の道
はゝきとうゝむ侍ゑいう

神八伊ゑあるとうわ乃一かる
ゑゝえたきめ犬乃あゝしさ
狼八月とまるこひうゝう
あゝたし
二
ゆ多部野乃道
ゆゝれハ露ゑんゝと垂ようし
りんよゝへゝゝひ乃ゑゝく
おさあひの脇をさする八苦ゑまく
ゝよゝそへゝ川ゝ食すゝむし
踏をゑふいあやゑ美比丘尼
ゑを伝ゝて天ゝんきんせい乃寺

海陸より行ひうわをを書る夜乃月
乃ゝや蓮乃ゝ乃油火
ゆらゆらき池よりのをゝ蛾をん
ぱゝへ乃縄をうかへをのを
毎日ゝ宮乃用こや下女
待ゝ知も出めをゝこゝや乃用
ちゝゝゝ乃仕事乃神ちをれて
おををゝふゝおゝをれを食
みゝうをのゝめきゝへゝ町ゝゝ
ちゝ乃蛾乃蛾ハ聖昊乃ゝ

夕月乃ゝまいゝくむふ墓前
正露ちゝゝ思ゝ乃山
ちすゝくゝと神乃昊ゝ川乃ゝ
ちゝゝくゝ川乃ゝ乃ゝ
田をゝふゝ乃いゝおちこゝゝわたけを
牛乃角ゝそ　エにゝこゝれを
ゝま壁ゝさいゝゝや太刀乃柄ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝふの宮
ゝ者を話すゝゝの腰屏風
きゝゝいゝゝ乃ゝゝ　茶乃陽ゝすき

露ちく花乃枝ちゃんとけちて
ふりまとちふ　釈迦乃おす
三
うき雲ハ脊歟もかまろひ
大雪かりてさしへるころ
いうくハ雪の日涙乃こころへき
を江路ちわも見いるむ人
さ浪や濱乃石乃をあこ
引あけぬ網をやかあ
ゐるびゐる菓童ハ泣を出るて
門口もろくちちきれ元の



作りめる四乃畔を切落し
おひまり石ゐるとぎゃゐるし
雪やゐ位鷺尼鷺せゐ鷺
ゐかくゐの八ゐ軒現乃向
俄にも後ゐん月乃戸振舞
三ウ
おゐ月乃方ゐ仏坊四乃ゐ
ひゐゐる後乃ゐゐかゐわゐて
山王まゐり面ゐおひゐし
坂やゐ移ゐれる遊蝶して
酔相人ハ道乃ゐ面ゐけ

いまゝめも法乃ちをへしおやわ
ふをを陰ゝ乃ををちをを袖
をこゝろ京乃へ乃乃吹りて
ゝ乃乃焼火ゝ日をおゝれ林
ゝゝ乃乃蚊をゝふゝ京乃道
夜乃せをて猫もいも林
まゝびを月乃出乃乃へし
かゝすゝゝき腊棚乃ゝら
花めゝ乃立第八ゝゝゝつて
すゝもをゝ経 無す已

名
掛ゝ見ゝ人乃乃涙八毛雨まゝく
んをとゝ 琴 夜 乃上
京乃出ゝ林ゝ乃面新名歳おれや
形書かゝとゝ乃をゝちハ文
立路ゝも立悲八ゝゝゝ世吉
ゝゝき初御乃寺ゝ元道
ん中八山下乃ゝゝゝくて
ゝ色乃鳥ゝをかゝくゝやゝき
かゝ道苦八かゝゝゝおれてゝ法ゝ
ゝゝゝ月や船乃にせゝの

うまとしたる二字なる額乃墨乃文字
をとりまゝん神社横門
乃所まわりめ道乃一筋よ
きしるを つく横ぬをるを
高中ハつよくやおん上乃弟
きとゞ乃ゐきハゝひなわり
ゝとわゝ乃あるき就も左くて
まゝをめゝけ乃のあいとゝさ
ゝ乃ゝよまとゝ乃めハゝおひへお
拾ゝ乃ゐくハふひん毛拾や

花見をゝをる日辻門乃わき
髪ゆふ家ハ長めさゝよもり

幾何　春雨

氣もそしれぬ園はあやる梅乃花
蛍火の色ちるる不ル下
忘よむふ歌学や徒れさくさん
調子乃おもあ糸竹乃音
くさをまく歳ゥ小雨ハたちろうく
おわくひるり酒よ点ふ時
鶯をちくく月にうきるふり
にくく汐ーあやーせく猫

露乃百姓屋のするのおそれく
隣くそくもも所よるくし
くひ乃くく恥ゆ中ル新　枕
天一面ル北乃むつとるし
そちもちもそむきく乃んくく
夫婦乃ちきちいくくへき
さ家ル松乃いそれいさもいへ
ル浦　毋ル　かれめいく
大風に行ゆ時乃よもくまく
初恋やこさの　芝屋何ゆく

はなさくころ馬八月あるひは
敦賀の市に立さく 神
たちうられ火花をはしさうひく
昔代も今も氣をもせてなり
二 長谷の川金乃流きれなし
むすふやこの石きはさ 緋
唐大和の朝乃時のこやけく
秘蔵をしつてを月三體詩
禅家は花れ仏るる小僧迄
なるもすれそうめん

七夕乃祝さんと ふるめきく
ゆ此上更ハ方にもしは後さる
赤朝まくこのそ式き秋て
ものをおふくふを麻乃あをれさ
月弓ハ何をのきくいるさ山
武仏乃ハ殺もそしさる
陣立乃仏仏乃役俄ゆるされて
城此 留也 する 老乃去今さ
三 邪人を 暗めゆ さ戸つけ
火を出 を乃め立 ろ

よもつくられし壁書共四月のひとり書
とこのうちなるさ屋の分別
こゝろを行く枝にはかれて
やうくわうた賀茂の氏神の
川なかひとつ水とくしてあくひけ
岩よせくゝ水そうらわる
遠山乃大きなるを見わたるあく
かいくけこくむ酒きこしめす
あくひまをへくむうふ文司
柳ちかくゝ日待月待

ゝと花乃ちゝゆふむをもく
さくれもうらや作保姫乃髪
三 ちかしきまゝ義よりすゝ肩をゝき
そくめちきやゝやれる児ハ主のそし
ちやくちゃん乃神のうつわ書たゝて
をみくをゝ乃礼乃場
あくハるくるきハ教をふとゝ紙
かくゝ第乃ハ伊ゝを弼おゝ
書通ハつゝの茅をのゝ伊ゝん
をゝ石ゝつくふ軒乃ゆき桁

かわ出て嵐ハ金のてりて
鼈やをの〻穴て入ん
大宮ハ溝も深ゝ川ミ
なるつまんとふさゝなる
月霧む程迄宮こそわまきれ
火さへともさゝあ多徳乃棚
三ウ
芝ゝ乃夕をゝとゝろゝ
例よたうひくゝ麦俵
はわめへき鯉やかゝわめん
網そて鮒乃ゝ出わきわ

骨くゝも昭乃浦ゝたのこゝ
をに相模とゝ名をゝとわめ
条わすゝ秋乃所ゝよ藤越
月乃九ゝの餅をゝ
おやけゝ乃ゝゝゝもゝゝめこて
ゝ君ゝ迄乃棒縄とゝ
ゝゝ知りをにあひくゝとゝわ
ゝひくゝゝわゝ武道具ハ何
宰人乃ん乃花ゝもあゝあ
ゝゝまわ尺ゝもたゝ

名
田にとる田面に後る鳥おそ
すへおりてつもかへる鶴遥
弁嘉乃勝をたそと待るゆく
つる遠くく行旅乃を乃
よろめきたたわに乱む行の秋
見れもおそしや百とせ乃姥
うつ的くゆ男をこひ偽く
おひ思ふあや接つ連乃中
ふるひ乃上ハとしあきかくもあ連
一天乃ゆるわりふひ



茶劫く的ハころ〳〵ころひうち
すへるや世もあさ谷底
月乃ゆ開仏乃ゆくむ隠遁者
ゆをきよめんと湯やわ乃ゆ
野にをる孔雀ゆとめ亟
乃しめる茶乃ゆ乃ゆこさ狼
見んこする恵女ゆをたうれく
書戸をおくれわしゆしめ
板をふるこゆ起ゆ連
四条乃ゆハ乱つひ乃ゆる

蝶や花と思ふまでをすて乗く
わるるかゝれいあやめうつひて

何綱　才五

折めかれあらくはうはるる蓮水
たうひて汗をるうた無法
くさうちにカくへ乃軍さく
ちきれまくと引甲其術
四第乃ふくいかくやむすふん
をこさくくめしき蓮不うる
月蓮も上中下部方をうち
肌をうひ消そう

うゑうこ紅葉の花は幕をうち
めんく棚をかさる市人
門おとは先ゑひとをやうゝん
形あのうへ乃屏風をいとく
歯とおとあ昆布から栗をもつけ
老乃ぱゝさを思ひやらしめ
たゝあ仏をおぢともあらゝく
仁義の道をきわうかハ何
分題をへえ論語をひろげ
分けめつてもはさハ判本屋

二

月清き窓乃机よりかゝり
露乃万もゝ花つとむ学問
花んゝ道はすき入く
孤川よりのゝさ
雲乃月は芸をゆむ遊山あ
恵とわくく料理あり
尺とわ用法師ハ庫裏よりこ
よる乃針に法する賢積
まちひゝあゝよわきすて
とく孤をころにさいかく

史付んとひろう野辺をとわまり
ぬすみ書やうの物
ちいさ乃かゝ水をよくきわて
先おもたむる鏡 蓋乃内
祝言にやうる也ハ乃ゝをあけ
尺れもゆゝしき小袖まきお
紙包を月代紙よ水をして
酒酬ま つわ乃ゝへさをそも
二ウ
ア乃か新酒ゝ酔ろ日野の者
うとんらえすろぞゝすい

食きゝ世あるかひもいそ
おゝまをそりて山りへ入らん
出ひしに拵ゝあ多ハ兵ハもし
ゝゝゝめるゝ代向後ハ乃ゝも
いゝけまきゝ仏合あ縁をむそゝもて
ものゝにとわし常ハ代みゝき
肥ゝハつゝやおん大相撲
おゝしゝ乃ハ代 くひやう
新ゝきゝ月代嵐乃おまくて
天乃ア 祝やゝくゝ応

花にそふ風の吹こむ部屋の内
かこわの乃うへハ月の雲むし
三
いうく玄碁盤の掃除せさるん
昔はえうふびんそきのころ
盃をミて九ゑめくうて
いく久しくというふ舞友
意代乃力ひきうわおし
形見をくわをする武家乃果
合戦より乱めるけ乃をおひく
あもし硅乃涙ゆうめく

彫やむむ座くまんん
うすまく月にたるため池
あちこちと長堤小田をおゑし
あまく碌乃おうる綾乃乃
里くをうけき天狗乃美ひう
三ウ
かけくうる枝れ木乃女
巣をかけしミ輪乃山蜂さまわ
にけて虚ゑ一ゆくゑすめ
茨幾を被よたくひろひいま
領城町へうふ堂そわ

恋せてと海陸をちらし罰たてて
かゝれつまるさ瘡よようよ
元食とゐわめる果を思ひやま迷
祈ふかゝきて氣をつたれ
おもてこく三川けさ野毛に立ちく
下女もたのこも美るほむちわ
ゑ乃賀をおそきれめる花れ去
うゝうにきく伝諸の乃さ海
月乃れ無をせ神の前
辭集てゝ川伝ゝ乃市

名
乃にめゝ頁花のひゝ布木綿
年貢おさむる代官乃門
牛馬をおひひゝくもつさ亟
乃限乃かとの さき百姓
おほゝく村ゝ村れ質をゐ
四ゝ一揆をたゝ用ん
武士を海ゝ山へさつひ
ゝつをゝ討捕上をれ
鉄炮上をのゝ廉をゝく祈ひ
雪をゝ野八乱もをゝゐわ

露乃玉と石白くと月をつく
れかれ桔梗萩の枝
廣庭乃つまわくと垣をゆひ
毎くれ出くく鞠をけり袖
常くよすきくるうやすてめん
殺生戒をたもり徧師ホ
看ま乃生人蛉やうさくい
きれいるわ枝乃内
ひくさ見よ金張とせ扇菊
舞まふ神のみきたちき

花乃香をとめくに緑こまわ
小仕た乃神ハのとけし

何甲一　市六

上巻乃終の文字やいさうつし
月乃人乃時くに刊　金屏風
長者にも廣目軒乃約束をて
すへ刊くえんよるくふ　奪匿
に前ちく三巻乃奥やうさうん
えうう　禅林のわいこりも
ゑゑるみくつ乃ゑ　行云師
一度乃人はゑ祝ふりさ反せる

ウ
ゑくとさの乃くゆいあゑゆ法後て
壇那　とたのむたく乃　古寺
ゑまわて武士なゑいゑりかくミ
ゑこ乃そむいあくれ門書
氏ゑくてすむ例なき宴会ゆ
ゑ乃は興　よゑるいゑ女くく
祝云をむすゑちきりれ新くく
新者れ　昆布やくふ初造
三方乃菓子をくまんと夕月ゑ
おりむ仰　乃ひろ乃ゑりむ

燒明の油をぬるあかし
嵐あれまする文の旧陣
大黒を勧請した花の去
年々長崎にしらく倉北戸
二
弥やさの末を乃年京米
岡の仕業をたれ代宿
制札よさ屋乃儀を書のもく
むさとえいく大寺の内
ちや鐘やぼくこれをあく盗人ふ
臆病ものいふむなりさ

とかそう針をうるも行さて
涼きやうにゆふ方髪
奇麗にもふらへ出る報うち
駐ゆうたかこさ懺法の場
山門のおわりそ儀なし
坂なりもむ走乃見よい
月夜ニ屋せこの猿の方乃てし
ゆをたをへしそこも祈る走
三うこんとひくくるつくそのさむろよ
なきるうしるしの脇もうりわ

ゐをうむとうそ目にぬれやまひて
もらくま竹は皆かれよもわ
うゝあるきのうれそわうへわ
そまふにうちてそふゝんぶり
ゆ夜乃ひそうへ月にめゝおさし
きゝゐゝのハ露よるみるよ
ゝさ中もおるまそる緣乃道
ちうひとやゐる尋ゝうせん
秘伝ある左郭乃皮乃ゐるく
きくに調ゝれめゐる 發 絃



房海やゝ白乃花れ浪の音
三 ハ志波れゝゐるころ
句萬ハ家乃衣乃ゝまゝひ
ゐゝ屋れ用の信布ゐんさ
相坂や琵琶を弾ゐる音ゝて
月もゝ入ゐしやすむ道ゐ
辻堂ハ演ゝき月乃吹ゐわ
後ゐるしや石仰たち
乃ゐゝに言る野乃ゝ秋ゐく
道世人乃すゐく君ゐひ

そらの月の宋の序わを引むすび
四方をあ〳〵たきを焚ふるわ
次しき犬乃敷くかけてきく
くすわらひする蛙の雲ちさ
けるくハいそら月をおゝむへき
三ウ 苔衣きる 愁 欲乃比
濃なるいやきたをせるおし
ゑのちよ別き出れ順礼
訊音ハ慈悲井一乃水をるまく
おまの命をたそうわそする

わけてる濃れ鮮ハをさうり
照田乃し浦よ永ハつきい
旅のうさかうつくさん小上藺
はるよ乃ゝうちに長枕して
思ひおもうつくとやゝく
ゑをそゝれる猫乃かあさ
うせおハ白よまもそゝ向へき
尺ゝもおやるき第乃すゝく
月花ゝるくさむ猿ハ皆よるう
かけ乃緒をやしる長乃月

名
なわうあの乃馬ハ我人まにおゝく
をくしるゝもせむさ山城
急仏や討死せりたあるゝん
逆引乃利益ふゝき池多
おはさ日丸若恵のゝあゝ柳花
きはすとそゝそ 恵を はさきし
大盗乃頂ハ一方とあけゝるゝこ
まへやゝへと不をしめわ
うきうゝあんん乃庭ハきゝ拍子
先んゝちつけのゝそゝふゝ月

ちゝおまわそゝの力をおけとわて
ゝ反乃文をかくハたゝも
月ちれつゝる亟乃をかゝへそ
加敗ゝ丸あふ神乃わゝしさ
運つきゝくまけ軍に生捕き
きのふ乃花よゝ乃義花よ
ゝもすゝゝ乗月や吹こむ坪丸四
作ゝ亟 酔をるゝん 玉 亟
あしきゝゝの魚乃数くよ
おわゝ名ゝし ゝあつけ乃四

爪紅粉をすりるに海しお
姉妹乃けきやうすると比



はるかすれば月やはた俄子万里
初嵐ハ小早せき舟
旁を乗あ乃潟山へ入部して
城乃うちよりんん四方ハ海
俳のなき語をなら乃亂のそよ
秋萩乃童ハ葉をひろへき
明朝ハとのくさ角をヤうり
まり〳〵亜〳〵連文弦さん

ず恐かけて新例をいそふ新蔵月よ
あためんとやおそふかの乃緒
定仲乃功力に銭をそそひしあ
ちやかくや世をわうう勇俗
川ゝ破れ紙を京を頭よまさ
紙をつくふハ腸やひゆん
鶉なく野ハたふくと露垂く
道筋ゆんしゆ涼草乃妹
かゝけを月ゝきはなたのひか
師走乃くハうそうさのを

家くよ先ん供をそこ餅をつき
竈乃おハにをゆきくらり
数は矢をそるくへくそ花うつ
二
武士乃あるむ屏風乃雨し
町人はひ芋なあそひにのるん
明蓋にしもそこつけそろくん
冷飯乃うけそひてそ大りるれ
ちわておやるくそ落乃くづ
小くゆをるとうつとそ蕎はあ
調よ乃うし八左報うくまん

月花も見んとて食よりつゝき
家をこめしより酉の時に行く
三 屠蘇の酌の間乃あわうを
いとて　元三乃朔
晦日乃夜まうわふ西にやとおし
川風やひのくれ御授せし　神
乃上にくさあくゝ乃吉事を
魚うりぬうを祝そうるん
武里八鷹つゝふそ法ゝ
ゝて　行をされを見ん弱へ

なゝてかく沖引をわけ火用ん
摩治乃をそき馬そ後ゝ
おゝ世ゝく高せ道をわゝ西
まともう　そし　ゝ　ゝ　文
月ゝて見ん中都築ふゝ果
三ウ 姥ゝやすむはむそゝ
ゝをこゝろゝ　ゝ　ゝ
猿ほ木すゝ月　ゝ
阿ゝけをゝ　ゝ
涼谷　乃　ゝ　へこゝん大石

月こそ見しめ天狗乃わさ見るや
自由自在　無法乃術
則ちるハかろ〳〵しくも出立く
塀を　乗こえ柄杓もも
門番ハ中〳〵思ひ入こと
おろ〳〵をこ〳〵かへる和尚さ
月よりもきく辻石ハせんりう
ちるみさよ露よきえん一命
花とおもふ美人ハ衣よ長き引きて
ちるや柳乃氣もみさ連髪

名
おひ口乃ろ〳〵ゆるゆるあこわのわさ
しほを若ゆ　いれよ口さ
人つふ川呂乃わろ場いろん
口さ〳〵そせ〳〵き敷奇氏小在変
さゆる畳乃表きりるし
扇乃地そそ有り　におさ
自害せ　名をとり強色ゆて
先祖乃塚ハ　もしるさ
年乃ハ石を　るまふ　ません
かゆ〳〵ほ　花屑ハ作り

おのひおやまのいこの山もあきなれ
ゝてゝゝ川あれ袖ハ露けき
錦木のくちぬひなきひるさ月乃嶺
猶ゝて花いきわもゝろやゝ
ゝ歌乃ゝ歌乃ゝ行ゝふ徒つゝひ
甲斐志こゝろかゝみけゝする
おさおひ強年ゝ花ゝゝゝくゝ
おやゝん乃君と流も年ゝわ
ゝあかゝゝら世ゝたくひゝゝれ
岡もゝてゝろもみゝゝ帝王

仏宝乃鉢乃母ハ花やゝゝ
恵魔化せもゝふ志ゝ

何刀　寿八

芦乃穂ハ波乃枕ハ[illegible]ん[illegible]や小
妹もかたまたかをや　鶯鶯
蔵乃とふ名ハわらくハせく
ゆうもあつてもよむこの乃題
月に[illegible]名乃古よ立わ[illegible]
秋風乃　秋をいとむ兵軍
うつくしむ　へハ島も乱逆蒼よ
諸乃もく　へさもわをれぬる神

ウ
酒に酔道乃ちまちにろひ乃そ
ま[illegible]ま[illegible]ひをくふ市人
俗を[illegible]くさ[illegible]れ機姫乃よろん
[illegible]ま[illegible]る昆沙門乃お
[illegible]乃[illegible]おく十二炮
[illegible]乃[illegible]ハ[illegible]
氣つ[illegible]ひ男ふもやをくをまゆ
[illegible]わ[illegible]へ[illegible]
面ハ[illegible]やう[illegible]面さく
[illegible]や

二階三階乃倉

燒元とふ苔にかをるきく
の没入れ 梅よ 柳抄よ
月乃雲花をよ向乃基よ
そし卒都婆もよ金仏
二
かすみのくるる 月かくれや
さしてゐれも見て 故さく 旗
をけし 小うち 清原乃宣陵子
居るうち 菓をやわらん 面陣
玄武右乃 腰もそのまおつさう
ふ肌くア んゆる 馬乃 ちやう

廟 ちるとハまさ 初んよく
をしるる 紙をつとめんもいさ
咲乱して 苔黒いうち 月をかる
よろめき あへる 猫そ 面 ゆる
るをををめ 人乃 弁めるおろう
やけどし あるくう きあころ
月をさ 戸をうき 面
三
一鉢と 大至ま わ 帯ををひ行
そろ〳〵 へるまさの 乃山

里に出る盗人犬にくひころされ
ぬつゝふ　猿そまゝ乃まめ
栗柿乃なへてあゝむ亥うこ
まけしたゝ稲を刈し
むゝ鳥乃わゝと見ゆる玉によ
見つゝ　ほなく垣も露けし
歴世数ゝ　後れる月乃朝朗
俳数奇　むれくすやさも
故えん乃つゝあ連奇自作わて
うゝくゝと見る美ようてよ



及ひなき花をさ海を越こう越
あるゝゝゝ　なるみさうをある
ゝゝゝうに沿あおきあのわやくて
風そもをしいまをわ見をわ
湯をあるれ海ちまを丸出
をそれゆをいゝふ蔭ちら
くゝれあ髪ハをゝこのわをへわ
よゝしまにつふ風せる
新くをさ月乃小田乃垂付ふ
をゝかるる雨乃　樗をくをわ

こせんの宿にきくるの郭公
明石の旅の遠路の乃うら
入道は此地にきかわ浅うを
くふと評　理乃うき塩蛸
うあいハあ[illegible]ふとの胡椒の粉
孫ぶとのいくむしいくせん
三ウ　百度風呂に入り[illegible]おやるや
日数をかうけうき塗師西工
神さゆる根乃若ばたひら雪
めいくるこれハ粉川路

一せいの報もきくあうひきく
酒は京表乃真ハさあらわ
くわ事をいひくカをぬきちし
氣乃ちうひハうそ赤々
玉を煤秋をきとものの風
ハみるこ乃ハあんく
雲をかくこ庵定むてんよ月清
夜目よ五を月上ゆる山乃夕
咲花乃花ちう　松乃笠は四
巣をくふ鶴はくびの形き月

名

千歳乃さゝゆわをなんむ〻薩
おそゝやゝ乃ら〻原乃中
ゆるびしハのゝて数〻拵小舟
祝詞乃事ふ弱乃陽おひ
事おゝ乃述せんけ而なゝく
多をゝるゝにゝ拵ハ高りゝん
たゝゝ〻不動乃像を作りな
〻〻にきゝ〻のゆる護ゝの壇
菩提や乃ゝめ魔法の山ゝて
くゝゝとハるゝきすゝ乃岩橋

かゝゝゝむゝ波ゝハ作ゝ庭
こびく景ある石乃枝く
ゆたゝむ月住ゝけ赤乃ゆ
浪乃雖ゝ俄に秋乃丹人
恵(う)ゝ於けるゆゝしめるわゝの次しや
むゆへたゆる一命ハゝゝき
ゑも見もきゝ科をこゝ通
すゆ乃たゝかき月不審子万
誓古ゝて代ゝゝゆゝしゆる鞠ゝ
礎もたゝゝも波ゝ果ゝる

坪乃内は花ゝ人乃群集て
遠く出し桃のさゝ川さ



一字文殿　十九

撞とゝ鐘も祢ひゝを哀れ小
尾上免めく月乃清き
れゝ枝をゝくゝ風と雲それく
面乃やとわを出れそや道
好弱も行京まやひゝゝん
をのき遥て遥さゝ
うて乃さゝ
ゝゝぐくとゝ

うつけの御屋もはゐ双六よ
石ばくらぬ宝めうまきん
尺あまきこしを乳ぶつる
かりきのうちれあやしせそ
ゑ座ていうよ島つぐ浦乃蜑
寺ぼ小風呂よ八さへもうさ
反むき尺源さ戸をすきこのさ
敷帳よう例る月をなるふ
答ろうてこあ和ひろおとふ
きく尺八もうる兄祢乃床

博多をさうふ小舟を立ぶく
おろすとて神をひくうを乃ぶ
花香ある枝上乃葉をとり出し
系例　元日ぶ朝
二　年男
水やせんすふん
水をわかして根芹ぼむ海
ふ島乃ちゐ餅よりやかき乃し
反乃わこ乃ふ機嫌そこめる
ぶ枝ぶある相撲乃をのとりまけて
露乃命を利ひんか園

盛りせぬ神もや　運ハ月乃蔭
見野　うちをうりなるしな
あふことハ　もおもちきわて
ひらを　枕乃蔭そおやまき
あたる　神社ハ　通ハ
をりさやまひ乃をうれさ
枕をなれよ　徳あるこの乃道
つふくうりやるうれ　茅
二ウ　船　熟ハ　嗜乳をうふきの中
二三盃　のむきやう　酒

肌すきあ乃　移れハ　若とわて
おうちもうそもおくひしめわ
下乃乃そも　古後ハやあきつん
かけをハへと　ケめなそく
おさあひうむをや　姫ふ月乃茶
鉋乃　鶴乃　塩そせんるこさ
蜜人ハうびく　嗜を　乾うて
月下　時宗乃寺　井　汲し
香をそわ　玉　参わすうくく
なみき乃露ハ　神　ケうく

花乃えんつきてあるを見るに
春ふる乃ち梅とのゝ五月雨
三
あゝうに苔厚まるも日乃つゆ
をゝてゝるゝ乃ま乃さゝ雫汁
蝋燭乃まゝきやまあさ風よ
やゝし障子をゝるや仏前
寺ゝゝハ屋さへおゝ鼠まゝく
袈裟も衣もてゝさゝわゝ
乃乃ゝ袖前に男ふさゝ刀
おゝしゝ乃代いゝせん

神をハにゝくしくもすゝきわて
たきれさゝしゝる蘇乃みゝゝさ
不出まるゝ武ゝあてゝゝよ乃ゝ
んゝゝゝゝ武家乃ゝすき
月ゝも富ともゝゝ喧嘩して
三
傾城町ハいつもすきま
露も素もゝいゝ乃ゝゝせんよ
んゝゝゝゝおゝゝえゝゝゝ
何ゝゝゝかんゝゝ弱よゝゝく
乃ゝゝ乃陣にすむついゝの

宇治川や屋形くとも流らん
あふひの日さき橋の一すちに
まりそくに来る浄土の道を志わ
夜禅上人も皆やめそし
花卿を壁にむかひかきわおりて
窓ちかのそく月いつわめる
赤松の篠をまけハ屋敷をを
吹秋風やいとふ上簡
蛛巣を花より紅葉よりわけて
庭の掃除そとへうちする

名
ぜうそもさかとに鞠やそうさん
鞠ハ包丁の道
をくせりもやうをを買求め
長崎ちもおかれ志あを
帆をかくる毋の遊びをめきて
もいうくも見ゆる大名
竹杖をはくにも臍をいかに
わうるかの鬱固たるも
小車北沢寺をあるくを
うきおひの井の水ぬる

あらもこらもさうるさき下女のにくよ
かくせてゆ乃をれくるるさ
月をとかくくるる弟よやれ果
おらかしれるハおやな云尺
ウ
めるるみくく扨屏風を質とをき
晴らまくくもゆる奥乃百
よあ入乃段ハ敷くく乃ゆをるる
思ふかりるさ興乃改先
葬礼乃道乃儀式ハきれいるく
辻うくめとそ初ひくくしまれ

大原や御幸なるる新花乃改
奏すう　御樂及双調乃奏

# 何仏　寿十

髪垂るゝ雪をそゝぐ姫小松
名乃枝低よ出れ春乃初
文くれ芸能乃上よのうぐく
使者ふえ清とへ玄角乃お
大名いつゝ屋敷よりうらん
永く沖にかれ出れ舟
夕浪乃涼き月よ雲をす
猿猴おろふ春乃岩波

（ウ）
淡泊るゝ山ゝ山代山ゝ
撫乃ゝふ道乃不自由さ
ともをしハ蕨を見に山をそゝ
頃をくゝらぬ犬そかしこき
隣まわこちゝ鳥代落かゝれ
竹杖をそゝ朝露
旁こむる野屋わけゆく庄坊
月ゝめくたのをおふおりも
よろくとまあさ出れ月毛ゝ
越んもこゝ　木幡山みち

宇治よりも大ならぬ茶をとつり
けふおひは何川一舟乃中
花と見る上臈衣乃初旅よ
酒色とそのえんものとけし
二
幸使とられしと文を書くすめ
修行者ありあふ宇治の山中
一礼をするの人は笠ぬきて
忌ある時乃ゐんきんは何
こわとそわ清らくまつる文不
ふたるわしきる石湯乃滝道

肌乃沈まくにうろくなり
痩せる人は妙わおもしろ
尻骨乃とさめ月もさん歳まで
こえ川乃上よ稀なる栄耀さ
月をこえ夜半行し猫乃かけ木わ
よふこを云川る鷹部屋乃口
若君乃庭礫やたてられん
城乃おくそともわうまきれし
三ウ
ざゞめき鶏くへする朝な夕な
おれうしかましきやません乃音

きゝありをたゝくこもかゝせく
月待乃和
歌しぬ所や氣かゝり丹かゝり
思ふ所に乃　屋ゝおゝ
さゝ本を乃あゝ木曽乃道をゝ
をゝゝわゝゝかけもゝ乃上
いまめをやゝおゝやゝ酒の酔
こゝろひゝゝ血ゝゝゝ勝乃皿
月をゝいてつく道よゝゝすゝゝ
若ゝゝゝもゝかゝゝ山坂



あれ峯乃一本の花を色ゝゝく
何をゝゝへハ名ハゝゝてし
雲乃奉をかゝゝ海乃具ゝゝ
ふゝこゝ庭あゝ　おゝゝゝゝ
数奇をやめゝ久ゝ食を控ゝく
ゝ海乃碁　食乃不出ゝ
宮ゝも高ゝゝゝを奉　俗
硯乃　むゝひゝゝゝゝ
凡ゝゝ　誓ゝゝゝゝ
かの つまゝゝ琴を　ゝゝ

[illegible]の八百も幾とかぞ
大うな幾ハ一つ[illegible]
すゑとをく[illegible]弟[illegible]る長旅よ
いくうつる月をとをさる
月の秋 歩 参[illegible]百世
いわてひ[illegible]ゆ[illegible]やつ[illegible]
世の[illegible]
岩百[illegible]
作わ[illegible]
と[illegible]

[illegible]
民の[illegible]
川上[illegible]
きと[illegible]
学問[illegible]
ん[illegible]月の[illegible]新[illegible]
歩を[illegible]
衣か[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]小田の[illegible]

名
おちこちも玉風を慰ハよろこぶく
冨士の人の浮れ来るき一村
立ぬく菖蒲の形の仮ぶち
さそ振舞にあへる市人
訊こ乃紙乃拍子を習ひえく
仙侍不可住ハ久しき
大数乃もけるやうな義とゐ
ゐんきぬやめく接世稼りしめ
くやくとゆをたをへハ罪ゆし
わさこし月乃入もとり

雲雀乃やうにみちよふ春くよ
遠くわうる乃乃春くく
芦浪こ数くく舟橋ををて
ゆ鴻まつわハ附めさくろう
こ本をもる尼上乃胸の中
いひ弱き乃紙理うへし
思ふ多いたのをとるもようや
しし也乃ドさん
泣えもわうあ使を辛り
下され春ハうきて腹拵

花鳥をそなへたてまつる
すゑ繁昌といのる吉乃日

追加　　立圃

云乃葉ふやく千枝よを継乃花心

とうたかうち
當世さんにそて爲する御諸乃凡作
んくさなくよろわさし作るの重
をうとやいうとんみすとやーさん思と
及ん無をもの乃下る切を
ある僻耳にきこてわるを此のあ
まいさくさんもあるのかおくわきあし
くうちうの乃絵もにまを作るされい
此に付合をもあるめーくるわをてゆく
あるてあしきやをのこりとめく

むか

きとする人おわむ乃乃なうひうす
さいわにんあるいかへりてんせきや
いうへそ乃人行をう付合をこのてする
が御んをそ自慢流るする乃
皆あるうへし自然おしき一白を
ときを出乃あわても白作わあく
みうしふうるいおるにを乃とをも
あーあるさ付合をくも一白乃流して
おるこうかるひんおしく仕をうんを
上のとなるへ一倍をたとへてを

いろはもあれどさ魚をもきくと料理
塩ぐぐ仕立る振舞を出れば高き
のんをそわせてうみ出るもくも切月
ぐぐ風味ぐきれいるハん源
あしきあをあるくきあるきをある
らくすると料理を作る
物語に於ては一句の仕立然所
要しみ連歌もあるべき体をもち
ぬあるきをつるとハ尺とたしくよき
おるのあるをあるき付合ハいるをいく

つゆのうたゆゆさるるが別会なり
詠歌大概よ情ハ新為先詞ハ舊可用とあ
みつ道ぐ業よハ源氏和歌抜萃よるとにて
わたくしとおれ下みたくにに
とにもあるとかけるれをあれんな
へきゆにうんあって俳諧ハせあ人なる
する人もるいつまを道を存下なる
きれとくれるの下も絵かくよくハるわ
ぐきあるんあるハ道よ入るとたく
ゆくおれ日やまく四ふんはてよ

ゆく末の後の世わにこそふたりぬる
夜はこそわかれて今はぬ吉野をも
なほ花ぬのこゝろ思ひくまなく此人
きまてさるゆをなほとすなおわをろ
るんしを懐紙をとれハ異四乃をゆ
むひくゝ和歌するうゝかくかたらいさき
ゆゝもいつけ給ふ人乃一さ辛出
るをそこゝるんあきとをとうく思
よきゝ扇をかさんまふゝふんゆへといれ
て仇をくいゆるよひとゝさ乃と志わる

平う盃乃邪をあてゝふと思ひ立世よ
ひゝれかるゝ口まゝ乃千白を弘光もて
あゆ乃にはゝわるゝ愚と乃たのゝ
とんむあやまわ乃ゝおかるゝきをある
人わるゝ所をせるゝれおるゝをこう
まゝきれと面ゝあれて露ゝりんと
ゆんかれとりんかゝわをも書くゝ
つゝんにそゝ筆此祈きゝひろ
こゝりちん

寛永十九壬午年

二月十七日

完全ノ為

幸和自筆

移轉 別下後